11 平成9年（1997年）11月10日 教皇様の声（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
NOVEMBER,1997 毎月10日発行 第211号

教皇様の声

王たるキリストの祝日・列福式とともに

あなたたちのために用意された国を受けよ

典礼年が間もなく終わろうとする今日、教会は王たるキリストの大祝日を祝うと共に、良い羊飼いの姿に注目します。キリストは良い羊飼いです。群れを導き、敵の攻撃から守り、羊に食物を与え（エゼキエル34・11以降参照）、そして何よりも、彼らを御父の家、すなわち父からキリストに委ねられた御国に導かれます。人間もそこで共に住むことができるのです。

イエズスは「羊のために自分の命を捨てる」（ヨハネ10・11）良い羊飼いです。十字架に架けられることで命を捨て、復活によって命を与えます。

「一人の人間によって死が来たように、一人の人によって死者の復活も来た。全ての人がアダムによって死ぬように、全ての人はキリストによって生き返る」（Ⅰコリント15・21～22）と使徒パウロは書いています。さらに加えて、「そして終わりが来る。そのときキリストは…父なる神に国を渡される。キリストは全ての敵をその足の下に置くまで支配せねばならぬ。最後の敵として倒されるのは死である。」（同24～26）

と言うわけで、キリストは国を受けると同時にそれを私たちにも与える使命をも受けられました。それは恩寵と真理の国、正義と愛と平和の御国です。

愛による最後の審判

この王国で、御子は権力を行使します。羊飼いとしての力のみならず、本日の福音が言うように、審判する権力もです。キリストは王です。国々を裁くのみならず、全ての人を裁く力がキリストにはあるからです。

この審判の次第を、聖マテオは印象的に描写しています。裁判官は「父に祝せられた者よ、来て、世の始めからあなたたちに備えられた国を受けよ。あなたたちは私が飢えていた時に食べさせ、渇いていた時に飲ませ、旅をしていた時に宿らせ、裸だった時に服をくれ、病気だった時に見舞い、牢にいた時に訪れてくれた。」（マテオ25・34～36）正しい人々がそんなことを自分たちがいつしたのかと問うと、王は答えて「まことに私は言う。あなたたちが私の兄弟であるこれらの小さな人々の一人にしたことは、つまり私にしてくれたことである。」（同25・40）

キリストは愛の王です。従って人間と世界への最後の審判は愛を基準として行なわれます。私たちがどちらの側に置かれるかは、愛したかどうかで決まります。キリストが私たちの前に示す御国は、一人ひとりに科せられた任務でもあります。福音に生き生きと描き出されたような愛の行ないによって御国を実現させるのは、私たちの責任なのです。

キリストは王です。全ての人、全ての国を裁く力がキリストにはあるからです。キリストは愛の王です。したがって私たちへの審判の行方は、愛したかどうかで決まります。福音に描き出されたような愛の行ないによって、キリストの王国を実現させるのは私たちの任務です。

今日、教会は新たに三人の福者を模範として示します。神と兄弟たちのため寛大に働き、神の国をもたらしてその後継ぎとなった人々です。審判の時、彼らは「父に祝せられた者よ、来て、世の始めからあなたたちに備えられていた国を受けよ」（同25・34）という声を聞くでしょう。本日の列福式で、私たちも神の国の秘義を公言し、あふれる愛で群れを導く王たるキリストを賛えましょう。

真理を証しするために来られたイエズスは、単なる哲学論議の主題ではありません。ご自身を啓示する神の生きた真理なのです。真理は救いをもたらし、人生を変えます。主はこのような真理を証し、御国の礎となる真理のために死を忍ばれました。（本日列福される三人も、生涯をかけて真理を証しした人々です。）

（…）兄弟姉妹の皆さん、これら福者たちの信仰と愛徳に倣いましょう。私たちの希望が不滅のものとなりますように。過ぎ去るこの世への関心に迷わされませんように。（…）

諸聖人の元后マリア、天の御国へ向かう私たちの歩みを導いてください。いつの日か、「私の父に祝された者よ」というキリストの声を聞くことができますように。アーメン。

（九六・十一・二四）

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
© 1997

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

説教・講話・書簡等の抄訳

Laetamur magnopere

「カトリック教会のカテキズム」ラテン語版公布について

〈使徒的書簡〉

「カトリック教会のカテキズム」ラテン語版の出版は、大きな喜びとなるものです。この使徒的書簡によって、私は今回の出版を承認し、公布します。もう5年前になりますが、九二年十月十一日に使徒憲章フィデイ・デポシトゥムが出され、同時にカテキズムの最初のフランス語版が出版されました。第二バチカン公会議開催から30年目のことでした。

ここ数年の、とりわけ各地方教会での広く積極的なカテキズムの受容と広範囲な普及は、たいへん喜ばしいことです。カテキズムは、世界中可能な限り様々な言語グループの人々が利用できるよう、各地の言葉に翻訳されました。八五年の司教シノドス臨時総会で提出された、「信仰と道徳に関するカトリックの教え」を網羅した文書を作成してほしいという要求が、いかに適切なものだったかがこの事実でわかります。

八六年に設けられた枢機卿と司教による特別委員会が作成したカテキズムは、前述の私の使徒憲章によって承認・公布されました。現在いささかもその価値と時機の良さは変わらず、今回のラテン語版で最終的な完成を見ることになりました。

今回の版は、九三年に特別に任命された各省からの代表委員会が準備したものです。ラツィンガー枢機卿の指揮のもと、委員会は精力的に任務を果たしました。特に注意を払ったのは本文の項目について提案された数々の変更箇所で、それらはこの数年間に世界各地から、また様々な教会共同体から寄せられてきたものでした。

これほど多くの意見が集まったということから、カテキズムが世界中でキリスト教以外の人々にも並々ならぬ関心を引き起こしたことが理解できるでしょう。カテキズムの目的はカトリックの教え全体を完全な形で提示し、教会が日々宣言し、祝い、生き、祈っている事柄を誰もが知ることのできるようにすることですが、こちらも達成されつつあるようです。同時に、カテキズムにその主要な要素がもれなく集約されたキリスト教信仰を、できる限りふさわしい方法で現代の人々に提示したいという熱望に注目が集まりました。教会の様々なメンバーによるこうした協力は、かつて私が使徒憲章フィデイ・デポシトゥムに記したことを再び可能にしてくれるでしょう。「多くの人々の協力関係は、まことに〈信仰の交響楽〉と呼べるものです。」（2番）

これらの理由もあって、委員会は寄せられた提案を真剣に受け取り、様々なレベルで注意深く検討してから結論を出して、私の承認を求めました。これらの結論が、委託されたカトリック信仰に関するカテキズムの項目のためにより良い表現を目指し、この信仰の真理の中のあるものに現代のカテキズム教授の要請に沿ったよりふさわしい説明の仕方を提供する場合には、私は承認を与え、それらは今回のラテン語版に収録されました。従って、ラテン語版カテキズムは私が九二年十二月に教会と世界に提示した教えの内容を忠実に再現しています。

本日のラテン語版公布によって、一九八六年に始まったカテキズム作成の仕事が終わり、先の臨時シノドスでの願いが幸いにも成就されたわけです。今や教会は、唯一不変の使徒的信仰についての新しい権威ある文書を手にしています。このカテキズムは「教会共同体にとって真正で有効な道具」、各地方のカテキズムを作成する上で、「信仰を教えるための確かな規準」、「確かで権威ある参考書」（使徒憲章フィデイ・デポシトゥム、4番参照）として役立つことでしょう。

カトリックの教えと信仰についてのこの真実で組織だったカテキズムには、キリストのメッセージのどの部分でも、新たな情熱をもって同時代の人々に提示するための、全面的に信頼できる手段があります。この文書は地方教会で要理教育に携わる全ての人にとって、唯一不変の信仰の遺産を伝える上で心強い助けとなるでしょう。聖霊の助けによって、キリストの秘義のすばらしい統一体と、そのメッセージを受け取る人々の様々に異なる必要や条件とを結び付けるためにも、きっと役立つはずです。公会議後のこのカテキズムが正しく用いられ、評価されるなら、要理教育活動全体が神の民の間に広がった新たな熱意を経験することでしょう。

これら全てのことは、紀元二千年が目前に迫った今、なお一層の重要性を帯びています。全ての人が福音のメッセージを知り、受け取って「満ち満ちるキリストの背丈にまで至る」（エフェゾ4・13）ため、福音宣教への献身が今、必要です。

尊敬する兄弟である司教の皆さん。カテキズムが第一に目的としている皆さんに、今回のラテン語版の発布を機会として、カトリック教会のカテキズムをさらに広く普及させ、託された共同体への比類ない贈り物として受け入れることができるよう、そうして尽きることのない信仰の富を再発見することができるように、一層の努力をお願いします。

神の民に属する全ての人の調和ある相互協力を通して、このカテキズムが全ての人に知られ、分かち合われ、それによって三位一体の一致を最高の模範とも起源とも仰ぐ信仰の一致を強め、地の果てまで広げることができますように。

キリストの御母マリア、霊魂と身体ともども天に上げられた方。これらの願いを託し、全人類の霊的善のために、その成就を祈ります。

カステル・ガンドルフォにて、一九九七年八月十五日、教皇在位十九年目に。（署名）

説教・講話・書簡等の抄訳

待降節第一主日のお説教

いまは目覚める時

〈無関心や惰性から抜け出そう〉

（待降節の恒例に従って、教皇さまは日曜日ごとにローマ市内の教会を司牧訪問される。）

★「主を喜び迎えよう。」（答唱詩篇の一節）

待降節第一主日を迎えて典礼暦年が新たに始まり、教会はキリストの秘義をあらためて一つひとつ霊的に体験します。

天地創造の最初の日から、すべてがキリストの下に集められ（エフェゾ1・10参照）、新しい天と新しい地（IIペトロ3・13参照）が現われる世の終わりに至るまで、この神の計画は人類の全歴史を取り囲んでいます。その中心となるのが、神の御子の託身の秘義です。

託身の瞬間に、聖霊の力によってみことばは処女マリアの胎内で「人となって」「私たちの内に住み」（ヨハネ1・12参照）、神の優しさと慈悲を人類に示しています。実際、主は人間を造られたのみならず、人をご自身の家族の一員として迎え、終わりのない栄光に定めるほど深く愛しておられます。

このような心強い確信に支えられているのですから、私たちは答唱詩篇の招きに応じ、喜びあふれて主に会いに行くことができるというものです。

★クリスマスの秘義のうちに主に出会いましょう。

これが待降節の第一の意味です。ガリラヤのナザレトからユダヤのベツレヘムへ人口調査のため出かけて行き、「宿屋に部屋がなかった」（ルカ2・7）ので馬小屋で雨露をしのがざるを得なかったマリアとヨセフの姿には心を動かされます。

極貧の中でお生まれになったのは、天使の群れが羊飼いらに告げたとおり真の神・救い主であり、布にくるまれまぐさ桶に寝かされた真の人間でした。

この想像もつかないような出来事を思い浮かべると、優しい気持ちになり、愛と感謝の心がわいてきます。同時に、良心が呼び覚まされて、無関心や惰性から抜け出すよう促されるのです。

「今は眠りから目覚める時である」（ローマ13・11）と使徒パウロは急き立てています。神は、御独り子をお与えになるほど私たちを愛してくださいました。こんなすばらしい賜物なら、それについてよく考え、ふさわしい寛大さで応じるべきではないでしょうか？罪の暗闇を捨て、神の恩寵の光に心を開くよう呼ばれているのではないでしょうか？これこそ、本日の福音書が私たちに勧めることなのです。

★「おいで、主の山に上ろう。」（イザヤ2・3）

預言者イザヤのこの一節は、救いの宣言であると広く解されています。預言者は補囚に直面したユダヤの人々にエルサレム神殿の再建を予告しました。

しかし彼の言葉は、ユダヤ民族の歴史をはるかに越えるものでした。どんな山よりも高い丘のイメージ、ヤコブの神の神殿にのぼる無数の国々の預言などでイザヤは新しい霊的な現実、すなわち約束の救い主に導かれる贖われた民、剣を鋤に、槍を鎌に変え、平和と兄弟愛によって人々の生き方を根本的に変える新しい契約を示しています。

★兄弟姉妹の皆さん、皆さんの小教区共同体はローマでも最も年若い部類に入りますが、このような平和と兄弟愛、聖性と福音宣教の理想に活気づけられています。小教区創設は15年前のことでしたが、急激な人口増加で、必要な社会施設のいくつかがまだ間に合っていません。

住民の大半が若い勤労階級の家庭であること、司祭やその協力者たちによる一層の司牧活動が繰り広げられていることは存じております。小教区には美しい教会があり、コミュニティ活動も行なわれていますが、子供や若者たちの十分な娯楽や、生涯教育を続けるための機会が、皆さんの望むほどには与えられていません。しかし、強い連帯と協力の精神で現在まで行なわれてきた司牧活動には、喜びを覚えます。たゆまぬカテケージス活動を通じて、皆さんは地域の全住民が個人主義に閉じこもることなくむしろ連帯感あるキリスト教共同体として、使徒たちの教会・初期の信者たちの模範に倣って成長するよう助けておられます。そのため皆さんはみことばに注意深く耳を傾け、共同体の典礼生活に加わり、互いに分かち合い、受け入れるよう真剣な努力を重ねています。

（…）皆さんが現在続けておられる努力を、放棄しないでください。そうすれば、新たな福音宣教に身を捧げることができます。まだまだ多くの人が福音をよく知らず、多くの人が私たちの具体的な生活の証しと、キリストへの喜び溢れた信仰宣言を待っています。

要求されるところの多いこの使命を皆さんに、家族たち、大人、子供、高齢者、そしてとりわけ若者たちに託します。皆さん一人ひとりのために、心からの祈りをもって応援することをお約束します。

待降節の始まりは、私たちのキリスト教生活の歩みを速める良い機会です。

★「主が来られる。」（マテオ24・42）

マテオによる福音書のこの一節は、四終についてのイエズスの説教の一部で、終末論的説教と呼ばれています。

イエズスは世の終わりにご自分が再び来ることを明らかにされ、注意してその日に備えるよう促しておられます。これが待降節の第二の意味です。

ここに、また他の箇所にも見られるイエズスの言葉から、今のこの世がいつかは終わり、人類の歴史も終わりを告げ、全ての人が審判を受けて褒賞か罰かに定められることが確信できます。これら全てのことを考えれば、「主がいつの日来られるかは誰も知らない」のだから、目覚めていなければならないことがよくわかります。

説教・講話・書簡等の抄訳

★「警戒せよ！」

福音書に見える注意深さは、人生を良く生きるための必須条件です。

神の賜物を無駄にし、思いや行ないにおいて神から離れ、人生が過ぎ去るものであることを忘れてしまうのは、実に簡単です。

現世の事柄ははかなく過ぎ去ります。それらは善に成長し、霊魂を育て、愛を込めて主と兄弟姉妹に仕えるための手段として用いられるなら、価値あるものです。しかしこの世の事柄が人生の主要目的となるなら、一番大切なことから人の心をそらせて物質世界の単なる付け足しに変えてしまうでしょう。

良い働きをもって、おいでになる主を迎えましょう。「夜はふけて日が近づいた。」（ローマ13・12）使徒パウロは、闇の行ないを捨て光の武具を身に付け、主イエズスを身にまとえ、肉に従って無秩序な欲望に落ちてはならない、と勧めます。

注意深く準備してクリスマスを迎えましょう。まず生活を神に、終わりの日に顔と顔を合わせて、愛と喜びのうちにまみえることになる神に向けましょう。

「あなたたちも、思わぬ時に来る人の子のために、用意をしているがよい。」

目覚めていましょう。キリストを着ましょう。あなたたちの救いは近づいたのだから。アーメン。（九二・十一・二九）

カタコンベ・信仰の証人

教皇庁考古学委員会の皆さん、心からご挨拶致します。

（…）地中海沿岸のキリスト教カタコンベ（地下墓所）を保存修復し、調査しておられる皆さんの仕事を見て嬉しく思います。イタリア、特にローマ近郊での皆さんの尽力は特筆に価します。最近一般公開された、ローマにある五つのカタコンベ―聖カリストス、聖セバスチャン、聖ドミティラ、聖プリシラ、聖アグネス―を思い出すだけで十分です。それらは永遠の都を訪れる大勢の巡礼たちの重要な目的地になっています。

殉教者の墓所はいつの時代も巡礼地だった

これらの記念地を訪ねる人は初期キリスト教の足跡に接して心動かされ、その昔、キリスト教共同体を動かした信仰を、いわば手に触れるように感じ取ることができます。カタコンベの地下通路を歩きながら、いくつもの信仰のしるしを目にすることでしょう。キリストの象徴である魚、希望を表わす錨、信じる心を示す鳩、そして墓に記された名前の横にしばしば見かける挨拶の言葉「キリストにおいて」。それらもまた、初期のキリスト信者たちを動かした霊的な熱意の証しです。その世界に身を置くことで、現代のキリスト信者も生きる上での有益な励みを見い出し、新たな福音宣教に向けて勇気づけられることでしょう。信仰の最初の証人たちの謙遜で雄弁な足跡を前に、心動かされずにはいられません。

たとえばノメンタナ通りにある少女アグネスの墓所やヴェラノのカタコンベの助祭ラウレンツィオの墓を訪れて、薫陶されずにいられるでしょうか。

ごく初期の頃から、私の前任者たちはカタコンベに意を注いできました。教皇聖ゼフィリヌスは、ローマ共同体のためアッピア街道に最初のカタコンベを築き、その維持を助祭カリストスに委ねました。カリストスが教皇になった時、ローマでも最大規模になっていたそのカタコンベは、彼の名と結びついたのです。

教皇聖ダマソは在位中、殉教者たちの墓を探し出して美しく飾り、墓碑としてすばらしい詩文を作って、熱心な福音の証人たちの功績を賛えました。蛮族の侵入と共にカタコンベが見捨てられた状態になった時でさえ、そのいくつかはなお巡礼地でした。中世の初めには、殉教者の墓所はイタリア、ヨーロッパ、地中海各地から巡礼者の訪れる地になっていました。

■十六世紀の終わり頃、カタコンベは研究や霊的考察の対照として見直されるようになりました。ある学者たちは聖フィリッポ・ネリを囲む活発な文化サークルを作りました。「ローマのカタコンベのクリストファー・コロンブス」と呼ばれたマルタ島の考古学者アントニオ・ボシオは、市内に六十ある埋葬地のうち少なくとも三十を明らかにしました。

以来、カタコンベへの関心は消えることがなく、教皇ピオ九世とローマの考古学者ジョバンニ・バティスタ・デ・ロッシという二人の偉大な人物が出会った十九世紀の中頃、頂点に達しました。キリスト教考古学という分野が歴史科学に加わったのです。キリスト教徒の墓地及びローマとその近郊の古代建造物のさらに効果的な保存と組織的な発掘調査のため、教皇庁考古学委員会が一八五二年に設立されました。

努力の結果は満足すべきものでした。教皇ピオ九世は、デ・ロッシの重大発見である聖カリストスの大カタコンベ（三世紀の多くの教皇たちの墓がそこで発見された）に感動し、発掘現場を自ら訪れることを望み、聖なる墓の前にたたずんで涙を流して祈りました。

カタコンベは多くの人のためのもの

教皇ピオ十一世は、一九二五年の自発教令で、教皇庁考古学委員会の義務を定めました。カタコンベに関する活動は、後にイタリア当局との合意に基づき、規則として成文化されました。（AAS, Inter Sanctam Sedem et Italiam conventiones, 18 Feb., 15 Nov. 1984, Vatican City 1985, art. 12, 2参照）

■現在、大聖年という歴史的な出来事に注目が集

説教・講話・書簡等の抄訳

まっていますが、その時、ローマのカタコンベは再び祈りと巡礼の地になるでしょう。聖なるカタコンベの中を歩く訪問者は、福音への最初の回心の雰囲気を味わい、最初のキリストの証人たちの墓を前に、その救いのメッセージを思い起こすことができるでしょう。

それを実現させるため、皆さんはすでにローマ市当局や考古学調査官と協力し、紀元二千年準備委員会と歩調を合わせて仕事に取りかかっておられます。

ローマの偉大なバシリカと同様、カタコンベも聖年の巡礼者たちに不可欠の目的地となるべきです。とりわけ新たなカタコンベにも足を踏み入れることができるよう努めておられる皆さんの働きに感謝いたします。委員会メンバーの皆さん、カタコンベの管理者、発掘に携わる専門家の皆さん、技術と専心をもって仕事に当たる人々に深く感謝いたします。（…）

全ての方々、努力と専門職の貢献で福音宣教活動を広めてくださる皆さんにも感謝を申し上げます。

皆さんと皆さんの仕事を殉教者の元后マリアの母としてのご保護に委ねると共に、私からも特別の使徒の祝福を送ります。

（九六・六・七）

三位一体の神と聖母

「聖母マリアと教会」シリーズ 14

1

教会憲章第8章の「キリストの秘義における聖マリア」には、マリアに関する教えにとって避けて通れない言及があります。その序文の最初の言葉は重要です。「いとも慈悲深く、いとも英知に満ちている神は、世の贖いを完成することを望み、『時が満ちた時、女から生まれたものとして、子を派遣した…それは、われわれを養子とするためであった』（ガラツィア4・4～5）。」（教会憲章52番）この御子こそ、旧約の民が待ち受けた救い主、歴史の決定的瞬間に、「時満ちて」（同4・4）御父から遣わされた方、一人の女性から私たちのこの世に誕生された方でした。神の永遠なる御子を人類にもたらしたマリアは、歴史の中で実現した神のご計画の中心となる御方から、決して離れることはありません。

キリストが第一であることを、キリストの神秘体である教会は示しています。教会の中で「信者は、かしらであるキリストに一致し、キリストの全ての聖徒と交わる。」（教会憲章52番）全ての人をみもとに引き寄せるのはキリストご自身です。マリアは母という役割によって、御子とかたく結ばれているので、信者の目と心がキリストに向かうよう助けます。

マリアはキリストに向かう道です。「天使の告げを聞いて、心と体で神のみことばを受けた」（教会憲章）マリアは、天から来られる御子をどのように私たちの生活の中にお迎えすればよいかを教えてくださいます。それは、イエズスを私たちの存在の中心、最高の「掟」とすることによってです。

マリアと聖霊の比類ない絆

2

マリアはさらに、救いのみわざ全体の源で、人間を御独り子の内に子となるよう招いておられる御父のすばらしいお招きに気づくよう、助けてくださいます。エフェゾへの手紙には、こんな美しい表現があります。「慈悲に富む神は、私たちを愛されたその大きな愛によって、罪のために死んでいた私たちをキリストと共に生かしてくださった。」（2・4）公会議は神を「いとも慈悲深い」と述べています。こうして、「女から生まれた」御子は御父の慈悲の実りであり、女は「憐れみの御母」であることをより深く理解することができます。

同じ意味で、公会議は「いとも英知に満ちている」と述べ、マリアと神の英知との密接なつながりに注目するよう勧めています。神の英知はその計り知れない計画の中で、処女を母とすることを意図しておられました。

3

公会議は、ニケア・コンスタンチノープル信経の表現を使ってマリアと聖霊との比類のないつながりを思い起こさせます。「主はわれら人類のため、またわれらの救いのために天よりくだり、聖霊によりて処女マリアより御体を受け、人となり給えり」と、聖体祭儀の中で唱える通りです。

教会の変わらぬ信仰を表明する中で、公会議は御子の驚くべきご託身が男性の協力なしに聖霊の力によって、処女マリアの胎内に起こったことを思い起こさせています。

教会憲章第8章の序文は三位一体という視点からマリアに関する教えの根本を示しています。全ては御子を世に遣わし、人間に表わして教会のかしら・歴史の中心として立てられた御父の御旨から生じました。この計画は託身によって実現しましたが、それは聖霊の力によるものであり、処女マリアという一女性の協力が必要だったのです。こうしてマリアは三位一体を人類に伝えるという計画の中で、不可欠の存在になりました。

4

三位一体の神のペルソナとマリアとの関係は、主の御母と教会の独自の関係と共に、正確な言葉で確認されています。「マリアは神の子の母になる最高の役割と尊厳を授けられた。従って、マリアは父の最愛の娘であり、聖霊の住む場所である。」（教会憲章53番）

マリアの最高の尊厳は「御子の母である」ことによるもので、それはキリスト教の教えや信心の中に「神の母」という呼び名で表明されています。これは驚くべき呼び方です。人となられた神の独り子の謙遜と、御子をこの世に誕生させるために召された一被造物に与えられた、最高の特権とがそこには示されています。

御子の御母マリアは比類ない方法で「御父の愛する娘」でもあります。その母性は神の父性と特別の類似を見せています。

使徒パウロによれば、キリス

不変の教え

ト信者は皆「聖霊の聖所」（Ⅰコリント6・19）ですが、この言葉はマリアにおいて特別な意味を持っています。マリアと聖霊とのつながりは婚姻という次元で一層強くなっています。回勅『救い主の母』に記したように、「聖霊はすでにマリアの上に降っていました。お告げの時にマリアは聖霊の誠実な伴侶となり、まことの神のみことばを受け入れました。」（26番）

マリアの尊厳は
あらゆる被造物を越えるもの

5　三位一体との特権的なつながりは、マリアに他の全ての被造物をはるかに越える尊厳を与えました。公会議は明快に述べています。「このすぐれた恩寵の賜物のために、マリアは全ての他の被造物よりはるかにすぐれている。」（教会憲章53番）でも、この至高の尊厳はマリアを私たちから孤立させません。教会憲章は続けて述べています。「マリアはアダムの子孫として、救われるべきすべての人と結ばれ」、「子の功績が考慮されて崇高な方法で贖われている。」（同）

ここに、マリアの特権及び三位一体との比類ない関係の真の意味があります。その目的はマリアが人類の救いに協力できるようにすることでした。主の御母の測り知れない偉大さは、こうして全人類に神の愛という贈り物を残しました。マリアを「幸いな人」と（ルカ1・48）宣言しつつ、全能の神が人類のために「御慈悲を忘れず」（同1・54）なされた「偉大なこと」（1・49）を人々は誉め賛えるのです。（九六・一・十）

教皇さまの動き

●9・21　カステル・ガンドルフォにて、お告げの祈りの時間に。ブラジルのリオデジャネイロで開かれる「世界家族の集い」に寄せて、「福音に鼓舞された参加者の皆さんは、信仰と責任感と寛大さに満ちた愛をもって生きることが可能だと、全世界に告げ知らせてくれることでしょう。家庭こそは喜んで生命を迎え、愛し、守り、教え育てる自然のゆりかごなのです。」各国から巡礼に訪れている信者たちに向かい、「祈りによって神に近づく家庭は、信仰とキリスト教的生活の学校となることができます。家庭での祈り、特に家族でロザリオを唱える家庭が増えますように。」お告げの祈りの後、教皇さまは、世界中で多くの人々を襲っている病に世論を引きつけるため開催中の「世界アルツハイマー病の日」に言及された。「この日が目標とすることに敬意を表すると共に、病に倒れた人とその関係者のため特別にお祈りすることを約束します。また彼らを助ける医療従事者と研究者のためにも祈ります。困難の中で見捨てられそうな人々に特別の注意を向ける、重要な仕事を果たして下さい。」

●9・24　聖ペトロ広場での一般謁見で、教皇さまは神の恩寵の母マリアの天国での取り次ぎについてお話しになった。「御子と深く一致したマリアは、人類の救いという仕事に自由意志で協力しました。この協力によって、キリストの贖いのわざと結び付く普遍の霊的母性が与えられ、マリアは新たな生命に生まれ変わった全ての人の母となったのです。」「天の御父は、贖い主の司祭としての取り次ぎと、処女の母としての取り次ぎを結び付けようとお考えになりました。」「キリスト信者が主の御母に捧げた称号の数々を見れば、教会と信者一人ひとりのためになされる聖母の取り次ぎについて、もっと理解することができるでしょう。」「代弁者となって、聖母は子供たちを数々の罪のダメージから守ります。聖母の助けを求めるキリスト信者は、マリアが子供らの必要を見過ごさない母の愛をもって、特に永遠の救いが危険にさらされている時、取りなし、助けてくださることを知っています。」「苦しむ人、危険な状態にある全ての人のそばにおられるマリアは〈助け手〉と呼ばれます。母なる仲介者マリアはキリストの前に私たちの祈りや願いを差し出し、恩寵を取り次ぎ、常に私たちのために取り成してくださいます。」

●9・27　教皇庁の美術・史料保存委員会の総会に寄せたメッセージ。「過去二千年のキリスト教美術は素晴らしいものです。芸術表現は福音を伝える良い媒体となってきました。教会の芸術保護は宣教・礼拝・慈善のためという特別な性格を持っています。これまで成し遂げてきた文化への信仰の植え付けの成果を踏まえ、教会の芸術保護の宝を守ってください。」

●9・30　ローマで開かれた若い修道者の国際会議参加者たちと会見された。「皆さんは全世界を前にして、選ばれた真理への証人です。」「奉献生活とはキリスト・イエズスと同じ心で生きることです。キリストに倣い、皆さんの時間、精力、若さと存在を御国と御父や兄弟たちへの奉仕に捧げて下さい。」

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙。■毎月十日発行　■定価　送料とも一部百八六円　■定期購読送料とも二、〇八七円　■詳しくは精道教育促進協会まで。

郵便振替
01130-
8-72393

●「教皇様の声」は来年度から紙面を一新します。

紙面サイズはそのままで文字が横組みとなり、さらに読みやすい紙面を目指します。ご期待ください。

ご購読者募集中

●年間1部……2,087円（税・送付料とも）
2部……3,424円　3部……4,767円
4部以上……1,517円x部数
7部以上……1,467円x部数

●不定期購読およびバックナンバー
……1部186円（税・送付料とも）

お申し込み・お問い合せは精道教育促進協会
〒659　兵庫県芦屋市船戸町12-6
Tel 0797-31-3452　Fax 0797-31-3448